論　文　要　旨

学位論文題目　子どもの生活自立をめぐる母親の役割移行

氏　　名　　花形美緒

本論文では、母親役割の取得から母親役割の縮小する時期までを概観し、とくに子どもが成長し生活する上で自立していく過程における母親役割の今日的な葛藤や、母親役割の主観的比重の推移を明らかにすることを目的とする。子どもの成長とともに求められる生活自立について、母親がどのようにその自立を促しているのか、母親が自身の役割にどのような認識をしているのか、明らかにする。さらに子どもの世話をする立場と子どもの教育に関わる立場での母親役割の葛藤を明らかにし、それら母親役割が縮小した際にはどのように生活を変えていくのか、示唆を得る。

第一章では先行研究のレビューを行い、子どもを教育する母親役割としての生活自立促進と学習促進について、ライフコースの変化と母親の就業が母親役割との間にもたらす葛藤について、子どもの離家後の母親の役割縮小について整理した。本論文では、先行研究から浮かび上がってきた課題について、計量分析と質的分析を中心として検討していくが、第二章ではそれぞれの調査の概要を示した。

第三章では子どもへの家事促進と学習促進による母親の子育て肯定感への影響を分析した。母親の子育て肯定感は、父親の子どもへの関わりが多いほど、母親が子育てを通しての成長認識を持っているほど、子どもが生活自立として家事のうち特に料理を行うほど、高くなることが示された。母親が子どもに家事を促している場合は子どもの家事遂行が増加するが、全体として母親が子どもの生活自立をそれほど促していないために、子どもの自立行動が年齢とともに実践できるというわけではないことが明らかになった。子どもに自立を促し家事行為を促すのは、子どものためというよりは母親自身が時間を必要としていることや、就業による家事時間の少なさを補うという時間的余裕のなさ、母親自身が子どもに手伝いをさせるとかえって面倒であると感じるような精神的余裕のなさによる影響があることが示された。

第四章では、子どもの離家を経験した母親たちによる、子どもの生活自立についてのこれまでの生活の語りをまとめた。子どもの身の回りの世話や家事を母親が自分の役割と自覚して行っていること、子どもの教育達成も母親の学習を促す役割の到達点の一つと捉えていること、そのために子どもに生活自立を促すという行為がなされにくいことを明らかにした。同時に子どもが生活自立の技能を身につけないまま離家することへの不安や、教育達成が母親の希望と異なる場合の葛藤も語られた。

第五章では、母親たちの語りから、母親役割の縮小・喪失の契機となる離家イベントと役割変化への気づき、現在の母親の生活にどのように影響しているかを分析した。子どもの世話役割を一手に引き受けていた母親たちは、子どもの離家後に急激に役割を縮小させることになる。子どもが徐々に自分の自立度を高めていき、家庭内での母親の役割がゆるやかに縮小した後に離家するのではなく、子どもの生

活自立の実践はある程度からほぼ一定であるために、母親の役割が非常に大きい段階で突然縮小することが、喪失感を高めるといえる。一方で精神的な変化や意識的な変化は、寂しさや喪失感として語られたが、母親役割を全て一度に失ったというよりは、少しずつフェードアウトしていくことや、全て母親が担うのではなく、父親やきょうだいなどがそれぞれの得意な分野でサポートしあうというような役割の委譲も語られた。母親の役割は「親として」子どもと大人同士の親子関係を新たに築きつつも相談など関わり続ける部分があるということ、そして新たな役割として介護や孫育てサポートなどが生じるために、母親役割を終えてからの自分の時間は非常に限定的だという語りもみられた。母親たちは子どもの自立により子どもの成長を感じており、子どもに見られる成長に子育ての達成感や区切りを見出していた。

母親たちは、子どもを教育するという母親役割を強い責任感のもとに遂行し、子どものためにと最適な学習環境を手配しようとしていた。そのために子どもの生活自立を促すことはあまり増加しないものの、母親が就業している場合には子どもは母をサポートするまでに自立していた。子どもを教育することにおける母親の役割が、子どもの生活自立実践や学業達成へとつながり、その到達によって母親としての子育て肯定感が高められた。子育ての達成観やこれまでの子育てに対する肯定感は、子どもが離家したのちにその母親役割に固執せず新たな関係を構築することにつながることもあるが、一方でこれまでの子育てを肯定し自分自身の母親としてのアイデンティティを守ろうと役割を継続させ固執してしまう、あるいは役割の縮小にともないアイデンティティを喪失してしまうことが考えられる。同じ子育て肯定感が、離家によって異なる結果を生じさせているのは、母親役割の主観的な比重をどのように認識していたかによって異なっていた。役割の主観的比重は自分一人で子育てを行なうという責任感や孤独感により増大すると考えられ、父親（夫）の子どもへの関わりなどが母親の役割責任における負担感を減少させていた。

母親役割の終焉は、母親役割のゴールをどこに設定するかによっても変わってくる。しかしながらそのゴールの先も母親自身の時間は同じように流れていること、母親の元に残った役割と新たな関係性を構築しながらその先の生活を組み立てていくことを考えていく必要があろう。子育てを通した母親役割の変化、とくに子どもの自立後における母親役割の減少や変化を示せたことによって、母親役割取得前後のみならず、子どもの自立へ向けた母親役割移行期への示唆を得られたことに本論文の意義があるといえる。